日本文学の中国語訳及びその諸問題の研究

——三島由紀夫の作品を中心に——

（要　旨）

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期人文学専攻

学生番号　　D165265

氏　　名　　張　貴生

本論文は第一章で日本文学作品の中国語訳を主な資料として、起点テクストと目的テクストの対比分析という方法によって翻訳の問題点を指摘し、適切な訳出の方法を見出そうとするものである。初めに三島由紀夫文学の先行研究資料を活用してその作品の特質を略述し、その作品の受容と翻訳のプロセスについて述べる。また翻訳された作品の例を取り上げ、翻訳論を援用して文学翻訳の視座でその翻訳を分析・検討する。翻訳における諸問題を指摘し、その翻訳の問題が翻訳に与えた影響などを検討する。さらに、翻訳が文学作品としての価値を持ちうるかといった問題をも検討の対象とし、最終的に文学翻訳の質の向上についての究明を目指す。

第二章では翻訳論やその論争については、古今東西を問わず各自の立場に立って多く研究がなされている。一般翻訳であれ、文学翻訳であれ、翻訳者の文学翻訳に従来の翻訳理論を当てはめることが妥当なのか、作品に込められた思想や作者のスタイル、時代の特徴や社会的な価値をどのように翻訳に反映するのか、ということも具体的な文学作品で検討しなければならない。日本文学の中国語訳から見れば、従来唱えられている様々な翻訳論だけでなく、それについて史的考察や、具体的な文学作品の翻訳をも検討する必要があると思う。

第三章では、翻訳に関連する代表的な翻訳論や文学翻訳論に関する理論を整理して異なる翻訳に対して唱えられた主張を明らかにする。本論を展開するために文学翻訳に関係する言語や異文化、イデオロギーなどの要因や翻訳論に関連する信・達・雅（すなわち内容に忠実であること、言葉をわかりやすくすること、上品で典雅な文章にすること）、異質化と受容化（同化と異化）、神似・等価という翻訳に関する方略を取り上げる。そして上述した諸要因と翻訳論とを関連づけ、三島文学の中国語翻訳とその受容を展開する。また中国語訳における諸問題も本章で提出された翻訳理論を援用して具体的に分析することにする。

全体的に日本文学漢訳の全貌を体現するために、日本文学中国語訳の史的考察を行う。20 世紀から現在まで、時代、文学作品、作家、流派、題材及びその評価などといった日本文学中国語訳のプロセスを考察し、その全体像を明らかにした。

第四章では日本文学漢訳の事例としては三島由紀夫文学の中国語訳とその受容について考察した。三島由紀夫文学が中国で紹介され、翻訳された時期、背景及び代表作を取り上げ、三島文学の中国語訳及び中国における受容のプロセスを詳細に論じ、三島由紀夫文学の評価や中国読者への影響にも触れる。三島とその文学作品のスタイル、思想、美学といった特質を論ずる。

三島文学の特質に関しては、日本や中国での先行研究でなされた三島文学の特質を概観する。三島文学のスタイル、思想、美学、レトリックの駆使、特別な言葉表現の技巧が中国語訳に十分反映されているか否かが極めて重要だと考えられる。

第五章では、日本文学の中国語訳諸問題の事例として「金閣寺」における「もの」の中国語訳諸問題というテーマをあげた。「金閣寺」の中国語訳——唐月梅訳のテクストを中心に三島文学の中国語訳の問題の一つとして検討・分析する。唐月梅訳の翻訳テクスト中の不適切な翻訳を分析した。文学作品の翻訳では単なる語句の誤解のみならず、文学における修辞法、文脈のつながりや言葉の表現にも配慮を払うべきである。翻訳テクスト全体を調べてみると、その中には若干の不適切な訳があることが明らかになった、そうした訳法において三島文学のレトリックや言語表現の技巧を中国語訳には十分に反映されていないことも明らかとなった。またその中に訳者が自分勝手に推測して訳出したであろう内容も伺える。本章では起点テクストに出現した「もの」を例に、その語句、修辞法、不適切な文学的表現といった不当訳のタイプ別に逐一分析、訂正した上で、筆者なりの新訳を提案する。

第六章では、日本文学翻訳の現代的状況に照らすために、現代日本文学翻訳の評価紹介と今後の課題というテーマをあげた。本論内容をさらに近代日本文学漢訳の評価の角度から五・四運動時期の翻訳を述べ、そしてその盛況や過程を明らかにする。さらに現在の日本文学翻訳の現状と今後の課題について述べる。既訳された日本文学作品における諸問題は翻訳文学や比較文学を研究するためには見直さなければならない。訳された今までの作品に対しては翻訳批評の見地からそれを指摘し、改訳することが必要になる。